

東北海区沿岸水温予報(2005年)

海域	経過 (4~6月)	現況(7月上旬~ 7月下旬)	見通し (9~11月)	見通しの背景	特異現象 (漁海況)
三陸北部 (青森県太平洋沿岸; 青森水研発表)	定線観測結果 6月 津軽暖流(尻屋崎線)の最高水温は、表層がやや高め、50m層、100m層が平年並み、水塊深度がやや浅め、津軽暖流の張り出し位置が平年並み 定地水温 4月:平年並み 5月:平年並み 6月:平年並み	定地水温 7月~7月下旬 平年並み~やや高め	津軽暖流域の水温は、平年並み。 津軽暖流の東方への張り出しは、平年並み	6月の太平洋定線観測結果では、平年並みとなった。 6月、8月の日本海定線観測の結果では、対馬暖流の勢力がやや強めからやや弱めとなった。	6/22 八戸地先定置網に120kgのクロマグロ1尾が入網 7/13 中型まき網漁船によりカタクチイワシの初水揚げ 7月上旬 太平洋側の定置網にブリ(イナダ)が入網
三陸中部 (岩手県沿岸; 岩手水研発表)	4月:表面:県北部 県中部の沖合と県南部沿岸でやや低めのほかは概ね平年並~やや高め 100m深:県北部沖合でやや低めのほかは概ね平年並~やや高め 5月:表面:県北部沖合から県中部沖合にかけてやや高めのほかは概ね平年並~やや高め 100m深:県中部沖合と県南部沿岸で平年並みのほかは概ねやや高め 6月:表面:県南部沖合で平年並~やや高めのほかは概ねやや低め~低め 100m深:県北部沖合から県南部沖合でやや低め、県南部沿岸付近で平年並~やや高め	表面: 県北部と県南部の沿岸から沖合にかけてやや低めのほかは概ね平年並~やや高め 100m深: 本県全域の沖合でやや低め~低めのほかは平年並やや高めとなっている。	表面は平年並~やや高め、100m深は沿岸で平年並、沖合でやや低めで推移する。	岩手県沖合の100m深では5以下の親潮系冷水が強勢であり、今後もこの傾向が継続すると予想される。 津軽暖流の東方への張り出しが小さく、沿岸に沿って南下することにより、沿岸は平年並となる傾向が強いと判断した。	4~6月の定置網では、サバ類が不漁であったが、7月にはいってから水揚げが回復してきた。 7月に釜石の定置網でサケ(未成熟)が漁獲された。
三陸南部 (宮城県沿岸; 宮城水研発表)	4月の表面水温は平年よりも低め傾向で推移したが、100m深水温はほぼ平年並であった。5月は、表面水温は平年より低め、100m深水温も低めとなった。6月に入ると、表面水温は、特に仙台湾南部海域で平年より極めて低めとなり、低め傾向が強まった。これに対して100m深水温は、ほぼ平年並となった。	7月上旬の水温は、表面ではほぼ平年並となった。これに対して100m深では、沿岸海域では概ね平年並であったものの、142°30'E以東の海域で平年より2~6低くなり、7月下旬現在、142°10'~143°10'Eの南部沖合海域の表面水温は18~21度であるものの、100m深水温は2~4度で、依然として親潮系冷水が分布している。	沿岸海域および北宮沖合海域では平年よりやや低め~低めで推移し、南部沖合海域では平年よりやや低め~平年並で推移する	「宮城県沿岸の海況予測モデル」により予測を実施。2005年7月の類似年は1997年7月となった。2002年夏以降、100m深の平年偏差水温は、宮城県全域で負偏差が継続している。現在も、南部沖合海域から暖水が波及しているものの表面のみで、100m深には親潮系冷水が依然として強勢である。	・夜光虫による赤潮が6月の観測でも確認された(例年では5月には収束する)。 ・調査船調査中のマンボウの視認報告が多い。 ・スルメイカ不漁で魚体が2~3cm小さい(6月の月間水揚げ量は前年比40%弱)。
常磐北部 (福島県沿岸; 福島水試発表)	4月:親潮系冷水の波及が鶴ノ尾崎沖距岸50海里付近から富岡沖65海里付近にかけてみられた。黒潮系暖水は、塩屋崎沖50海里より沖合から富岡沖100海里付近にかけて薄い波及がみられたのみでその勢力は弱い。水温は平年よりやや低めであった。5月:親潮系冷水の波及が本県沖距岸50~75海里付近の表層にみられた。黒潮系暖水の波及は本県沖95海里より沖合にみられ、灘側に目立った波及はみられない。水温は平年よりやや低めであった。6月:親潮系冷水の断続的な波及が距岸30~40海里より灘側のみみられた。より沖では黒潮系暖水が広く分布した。水温は平年並み。	7月:黒潮系暖水の強い波及傾向が本県沖50海里より沖合にみられるが、本県中南部海域の30~40海里付近に親潮系冷水の強い波及がみられ、水温は平年より低めとなった。 8月:親潮系冷水の目立った波及はみられない。沖合よりの黒潮系暖水の波及が本県沖30海里付近までみられ、水温は平年並みとなった。	沖合よりの黒潮系暖水の波及が時々折られ、水温の昇温がみられる場合もあるが、期間を通して概ね低め基調で推移すると予測	10月頃まで黒潮流の流型はC型で推移するとみられ、したがって房総沖での黒潮の離接岸に伴い福島県沖に沖合よりの暖水波及がときおりみられると予測される。自己復帰モデルによる予測水温偏差はやや低め~低め。	4月に最盛期を迎えたコナゴ(イカナゴ幼魚)漁は、例年5月上旬には終漁となるが、今年は5月中旬までまとまった漁獲があり、全体の水揚げ量は、好漁であった昨年より33%多いものとなった。
常磐南部 ~鹿島灘 (茨城県沿岸; 茨城水試発表)	4月:親潮系冷水の影響が強く、平年よりやや低い~極めて低いで推移した。黒潮の流路の変動により度々暖水舌が形成された。 5月:黒潮の流路の変動により、弱い暖水波及が発生したが、強い親潮系冷水の影響で、低い~極めて低い水温で推移した。 6月:5月より冷水傾向は緩和したが、継続して親潮系冷水が分布し、平年より低い~極めて低いで推移した。	7月:6月より表面水温は、上昇したが、親潮系冷水の影響で、中層はほとんど消音せず、低い~極めて低い水温で推移した。 黒潮は、A型からC型へ変化した。 8月:表層、中層共に水温は上昇し、冷水傾向は傾向は緩和したが、親潮系冷水が分布した。沿岸は平年並冷水が波及した北部中層は低い、暖水の波及した沖合は極めて高いという水温分布となった。	9月~10月:沖合からの暖水波及により水温は、平年並みに回復する。 11月:暖水波及は継続は冷水域があり、本格的な暖水型にはならない。D型形成時には一時的に大きな暖水波及があると考えられるが、N型になると、再び水温は元に戻ると考えられる。	大蛇行終了後の近年(1988,1991)の経過を見ると、数ヶ月はC型の流路をとり、房総で離接岸を繰り返す。一時D型を経てN型へ変化する。それにより、常磐南部から鹿島灘の水温は、平年並~高めで推移するが、現在、まだ北部海域には冷水域があり、本格的な暖水型にはならない。D型形成時には一時的に大きな暖水波及があると考えられるが、N型になると、再び水温は元に戻ると考えられる。	・春シラスが2年続けての大不漁

各階級の水温平年偏差の範囲

階級区分(出現率)	三陸北部	三陸中部		三陸南部	常磐北部	常磐南部~鹿島灘
		距岸10海里内	距岸10~70海里			
極めて高い(2.5%)	+2.4 ~	+4.0 ~	+6.0 ~	+2.4 ~	+4.0 ~	+4.0 ~
高い(7.5%)	+1.6 ~+2.3	+2.5 ~+3.9	4.0 ~+5.9	+1.6 ~+2.3	+2.5 ~+3.9	+2.5 ~+3.9
やや高い(20%)	+0.7 ~+1.5	+1.0 ~+2.4	1.5 ~+3.9	+0.7 ~+1.5	+1.0 ~+2.4	+1.0 ~+2.4
平年並み(40%)	+0.6 ~-0.6	+0.9 ~-0.9	1.4 ~-1.4	+0.6 ~-0.6	+0.9 ~-0.9	+0.9 ~-0.9
やや低い(20%)	-0.7 ~-1.5	-1.0 ~-2.4	1.5 ~-3.9	-0.7 ~-1.5	-1.0 ~-2.4	-1.0 ~-2.4
低い(7.5%)	-1.6 ~-2.3	-2.5 ~-3.9	4.0 ~-5.9	-1.6 ~-2.3	-2.5 ~-3.9	-2.5 ~-3.9
極めて低い(2.5%)	-2.4 ~	-4.0 ~	-6.0 ~	-2.4 ~	-4.0 ~	-4.0 ~